

ISSN 1910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 104 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 8 年 6 月 21 日

ナベヅル



1996. 4. 4 苫小牧市柏原

撮影者 佐藤正秀

〒053 苫小牧市有珠の沢6丁目30-13



もくじ

私の探鳥地 (32) 厚沢部 [土橋自然観察教育村]	
道川富美子	2
ヤブサメのあれこれ	3
平成7年度 総会報告	11
探鳥会報告	13
探鳥会案内・鳥民だより	15

厚沢部【^{つちはし}土橋自然観察教育林】

私の探鳥地 (32)

道川 富美子

ここは、私のお気に入りの探鳥地のひとつです。道南に来なければ見られないブナ林と、ヒバ（ヒノキアスナロ）林の深い森が、ここに 있습니다。

たいていは、2日間の休日を利用して出かけています。札幌を車で早朝に発ち、厚沢部町には昼頃着き、その時々で、俄虫の神社周辺とか俄虫渓谷あたりをぶらつきます。翌朝、明るくなると同時に土橋自然観察教育林の森の中に入り、昼食をとってから札幌へ戻るというパターンです。

数年前、どうしても見たい花を探しに出かけ、偶然立ち寄ったのがきっかけです。駐車場に車を止め、ドアを開けると、すぐ横の枝でオオルリがさえずり、まわりじゅうの樹からカラ達の声が聞こえてきました。このままでは帰れないと、双眼鏡を首に、偵察と称して教育林へ入っていったのです。で、いくらしもない内に、いるとは思いつきもしなかったクマガラが鳴きながら飛んであらわれ、目の前の太い幹をたたいてくれました。そこを離れて間もなく、アカショウビンが……。

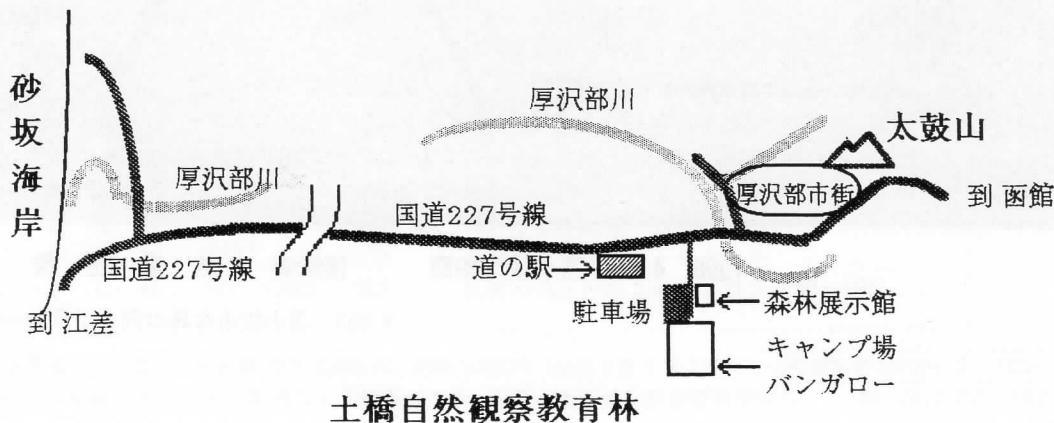
どのあたりに、どんな鳥が、と書く必要は全くないと思います。この森は藩政時代から永く保護管理されてきて、原生に近い形の森だそうです。この中だけで、針葉樹林・広葉樹林・沼・沢……とさまざまな環境が用意され、何が出てくるかは行ってのお楽しみ、といったところでしょうか。

道はいくつかに分かれています。分岐点には、次の分岐点まで何mと示された案内板が立ち、迷う心配はありません。ちょっとした登り降りがあり、湿り気を含んで滑りやすくなっている所さえ注意していただければ、安心して歩けます。落葉を厚く敷いた道が、足の疲れを吸い取ってくれます。

また厚沢部川右岸の太鼓山（標高164m）は、山頂で飛び跳ねるとドンドンと音がする山で、雑木林やスギなどの植林地の中を自然歩道が通っています。ここもなかなか良い所です。

車ですと、砂坂海岸がすぐです。クロマツ海岸林の前浜は1,500mにも及び、去年はアオアシシギを見つけました。厚沢部は渡りのコースと聞いています。私は、5月、ブナの展葉の頃、札幌とはまた違った春を楽しみに、欠かさず出かけております。

〒065 札幌市東区北32条東6丁目



ヤブサメのあれこれ

森林総合研究所北海道支所 川路 則友

「ヤブサメ」。なあんだ。よく知ってるよ。春になったら、あちこちの森で、あの特徴的な鳴き声が聞かれるし、だれでも簡単に識別できるからね。といった声が聞こえそうです。そうなんです。あのだれでもがよく知っているヤブサメ。探鳥会でもあの鳴き声はリーダーからまさきに教えてもらえることでしょうか。しかし、その持ち主である小さな鳥の生活についてよく知っている人がどれほどいらっしゃるのでしょうか。少なくとも、その姿をチラッとでも見た人でさえ、意外と少ないのではないのでしょうか。このように身近な日本産鳥類であっても、まだまだその生活の知られていない鳥は多いのです。今回、この紙面を借りて、ヤブサメというすばらしい小鳥をよく理解していただけるように、その生活の一端をご紹介しますと思います。皆さんが今後観察を続けられる上で、参考になれば幸いです。

名前について

まず、ヤブサメという鳥を理解していただく第一歩として、その名前を取り上げてみましょう。鳥の名前には、語源のはっきりしない名前が結構多いものです。とくに古くから用いられているものにその傾向があるようです。例えば、タカ類の名前なんかがそうです。「ミサゴ」、「トビ」、「ノスリ」、「チュウヒ」なんて、いったいどこからきた言葉か、ほとんどわかりませんよね。つい最近、「ノスリ」は「野を擦(す)るようにして飛ぶところから」とか、「スリ」は「ワシ」を示す韓国語から来ているんだという話が伝わってきましたが、私の勉強不足も手伝って、まだまだわからない名前ばかりでいやになってしまいます。

ところで、本題の「ヤブサメ」に戻しましょう。一般に生物の名前は混乱を避けるためにカタカナで表記することになっていますが、ひらがなで「やぶさめ」と書くと、これまた皆さんご存じの「流鏑馬」が思い浮かべられます。これは、鎌倉時代に始められたという、馬に乗ったまま的を射る勇壮な武技の一つで、とてもあの可憐な「ヤブサメ」とは似ても似つかないものです。それでは「ヤブサメ」の語源はいったい何でしょう。ヤブサメの「ヤブ」は言うまでもなく「藪(やぶ)」で異論はないと思います。あんなにヤブが好きで、ほとんどヤブから外に出るのを見たことがないというくらいです

から、その生息場所の特徴から名付けられたのでしょうか。そこで問題は「サメ」です。昔の著名な鳥類研究者である山階芳麿、清棲幸保両氏は、「サメ」に「鮫」という漢字を当てています。すなわち「藪鮫」です。おまけにそれにならったのか、あの「広辞苑」(岩波)にもそっくりその字が書いてあります。これで私もういぶん悩みました。羽毛が「鮫の色」に似てるんだらうか。それとも触った感じが「鮫肌」なのかもしれない…とうとう結論が出ませんでした。

そこで、今度は発想を変えて「サメ」というのを「春雨(はるさめ)」とか「氷雨(ひさめ)」といった「雨」の字に当ててみたらどうだろうと思いつきました。ヤブサメといて、まず思い浮かぶのは姿よりもあの特徴的な鳴き声です。あれを、まるで虫の声のようだという人もいますが、何の先入観もなく、目を閉じたまま自然の一部としてあの声を聞くと、春先、森の中で木々の葉っぱの間から細かい雨がシトシトと降ってくる音に似てはいないでしょうか。そう考えると納得がいきます。はっきりとした証拠はありませんが、そう考えた方が風情があるような気がします。すると、ありました。ありました。ごく最近出された「カラー版日本語大辞典」(講談社)には、「藪雨」と載っています。さらにもう一つ、「日本大歳時記」(講談社)には、なんと夏の季語として「藪雨」が載っていました。時を同じくして、同じような発想をした人が他にもいたのだとうれしくなりました。



写真1 ヤブサメ(山田良造氏撮影)

そういえば、生物の鳴き声を雨音にたとえたものに、「セミしぐれ」なんてのもあります。昔の人は、生物と

自然現象をうまくマッチさせて、上手な表現をしたものだと感心させられます。ところで、「日本大歳時記」には、ヤブサメの別名として、「変わり鶯」、「ササムグリ」、「ササムシ」、「ヤブッチョ」とも呼ばれると書いてあります。ヤブサメとササとの関係は、昔から注目されていたようです。

ちなみに、同じく昔の有名な鳥類研究者である黒田長礼、内田清之助両氏の図鑑には、ヤブサメの項に「シオサザイ」という異名が載っています。これは、「ミソサザイ」がかなり古くから知られている鳥で、それによく似ているが、比較的下面が白っぽいのでこの名が付いたとされています。すなわち、「サザイ」というのは、「ミソサザイ」のような小さな鳥のかなり昔の呼び名で、そのうち全身が褐色っぽいところから「味噌サザイ」、白っぽいところから「塩サザイ」と呼ばれるようになったということです。

さて、この鳥は日本ではもちろん「ヤブサメ」の名で親しまれていますが、他の国では何という名前になっているのか、興味ありませんか。「ヤブサメ」は、世界的に見ると極東アジアのごく一部の地域でしか繁殖していません。すなわち、日本列島、中国東北部の一部、朝鮮半島、ロシア沿海州およびサハリン南部です。一方、冬には中国南部、フィリピン、東南アジアにまで渡ります。タイの図鑑には載っていますが、そのお隣のマレーシアの図鑑にはないところを見ると、このあたりが越冬地の南限のようです。したがって、これらの国々ではすべて親しみのある名が付いている「はず」です。

まず、英語名を見てみましょう。通常「Short-tailed Bush Warbler」を使います。「Short-tailed」は「短い尾をもった」「Bush」は藪（やぶ）、「Warbler」は「鳥が声を震わせて上手にさえずる」といったそれぞれの意味があるので、まさしく「ヤブサメ」の特徴をとらえた名前としてピッタリ来ると思います。ちなみにウグイスは「Japanese (日本の) Bush Warbler」です。

韓国語（ハングル）では「スッセ（少し発音が違うかもしれませんが）」といい、これを辞書で調べてみると「村落の近くの藪にすむ小鳥」という意味のようです。中国語では「リントウシュウイン（鱗頭樹鶯、これも発音に間違いがあるかもしれませんが）」といい、漢字から読みとると、「鱗模様をした頭をもつ森のウグイス」といったところでしょうか。しかし、台湾では、同じ中国語で「テュアンウェイユイン（短尾鶯）」という表記のされた図鑑もあります。さらにロシア語では「КОРОТКОХВОСТКА（コラツカフポストカ、これも発音は自信なし）」といい、まさに「短い尾」という意味です。これまで書いてくると、「ヤブサメ」が、外国では短い尾もしくは藪にすむかわいい小鳥という名前の付け方をしているこ

とがおわかりになったことと思います。それに比べて標準和名の「藪雨」のなんと風情のあることでしょうか。日本人の花鳥風月の心、ここにありといった感じです。

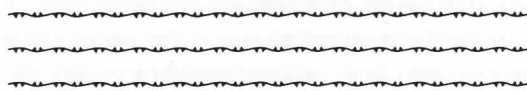
ところで、生物の名前には、もう一つ万国共通のものがあります。スウェーデンの生物学者リンネが提唱した「学名」というもので、通常「属名」と「種名」の連記であらわす二名法が使われ、おもにラテン語やギリシャ語による命名がなされています。それによると、「ヤブサメ」は「*Cettia squameiceps*（ケティア スクアメイツエプス）」と書きます。属名の「*Cettia*」は、「ヨーロッパウグイス」に付けられた名で、その仲間であることを示します。種名の「*squameiceps*」は、「ウロコ模様の頭をした」という意味です。これは前述の中国語名に似ています。おそらく、中国の研究者はこの学名を訳して、名前にしたものと思われる。事実、捕獲したヤブサメの頭の部分をよく見ると、褐色の羽毛一枚一枚の先端がやや薄い色をしています。それらが重なると、まるでウロコのようにも見えます。昔の分類学者は変わったところに目を付けたものです。

ながらく名前に関する雑学を述べてきました。それでは、そろそろヤブサメ本来の生活様式について話を進めようと思います。

繁殖生活について

ヤブサメはご存じのように、日本では夏鳥です。したがって彼らが日本に滞在している間に行うもっとも重要なイベントは、繁殖をして、より多くの子孫を残すことです。そこで、私は、札幌市豊平区羊ヶ丘にある職場（森林総合研究所北海道支所）の実験林で、この6年間ヤブサメを追っかけて、彼らの繁殖の様子を観察してきました。それでわかったことをこれから少しずつお話しします。この森は、西岡水源地に連続した形になっていますが、明治時代に山火事があって、そののち再生した林と言われています。まず目に付くのが老齢化したシラカンバで、それにミズナラやハリギリなどが混じっています。林床は、典型的なササ群落でおおわれ、チシマザサとクマイザサが混在した石狩平地林の特徴をよく備えています。

ここでは便宜上、ヤブサメの羊ヶ丘での生活をわかりやすく6つに分けることにしましょう。すなわち、渡来期、巣作り期、産卵・抱卵期、育雛期、巣立ち期および渡去期です。



1. 渡来期

ヤブサメが羊ヶ丘に現れるのは(渡って来るのは)、毎年4月の末です。正確に言うと、4月24日前後といったところです。これは毎年、ほとんど変化がありません。ちょうど実験林内の雪がとけて、ササが立ち始め、地面が見えるようになった頃です。まず、早朝に突然あちこちでさえずりが聞こえるようになります。例年その少し前から、林内のあちこちに網をかけて通過する鳥の捕獲をしています。さえずりの聞こえる日までヤブサメはまったく捕まらないのが、その日になって突然何羽かが捕まりだします。このことから、ヤブサメの初認記録は「さえずり」の聞こえ始めた日として間違いないようです。ヤブサメは捕獲すると、必要な体の計測をしたのち、識別用のカラーリング(色脚環)を付けて放します。これは、観察者から見て個体どうしの区別の付かない動物に対して行われる方法で、イギリスのD.ラックたちが始めて以来、特に小鳥にとっても有効な手段として鳥の行動生態の研究によく使われています。たいていの鳥は、脚環を付けた直後は少し気にしますが、やがて慣れてしまいますし、行動自体も付けていない個体とそれほど異なったものを示すわけではないので、それほど負担にはなっていないようです。羊ヶ丘では、これまでに環境庁製の番号付き金属脚環だけ付けたものまで合わせると、ヤブサメだけで1,300羽余りになります。しかし、これらの大半は、一時的に羊ヶ丘を通過しただけと思われ、二度と捕まりません。運良く羊ヶ丘にとどまって繁殖する個体も結構いますが、このうち翌年も同じ場所に帰って来るのは、ほんの数パーセントに過ぎません。おそらく渡りが予想以上に彼らの重い負担になっていると思われれます。

渡って来てしばらくの間、オスは、比較的高い小枝(高さ2~10メートル)に止まって、さかんにさえずります。ヤブサメの姿を見るにはもっともよいチャンスです。彼らは、自分のさえずりに酔いしれているのか、メスをさがすのに必死なのか、結構近くまで寄ることができます。おそらく5月の第一週あたりの探鳥会では、参加者全員が身近にヤブサメを観察することも可能であると思います。このころの声は、あの「シーシーシー」とか「リーリーリー」とか聞こえるさえずりに、するどい「チチチッ、チチチッ」という警戒が混じります。ときには「チョッ、チョッ」というミソサザイに似た声も出します。これらは、オスが隣り近所のオスにかなり敏感に反応していることを思わせませす。

さて、これも脚環を付けてわかったことですが、メスは通常、オスに遅れること約10日で羊ヶ丘に到着し始めます。もちろん、遅く渡って来るオスも結構いるので、

羊ヶ丘の森では、この時期に熾烈ななわばり争いが繰り広げられます。とはいうものの、これまで観察してきて、ヤブサメはいたって平和主義の個体が多いのか、シジュウカラやキビタキのように直接オスとおしがつつきあったり、もつれるようにして戦ったりという光景はほとんど見られたことはありません。いつの間にか自分の領域というものが決まって、近所のオスはそれを容認するといった状態がそここで見られます。大体、自分の行動域が決まってきたオス1羽のさえずっている広さを調べてみると、平均して約0.5ヘクタールくらいです。しかし、それでは10ヘクタールの面積があったら、20羽のオスがいるかという、そうではないようで、隣りどうしで比較的広い空白地域のあることも多く見られます。羊ヶ丘では平均すると1ヘクタールあたり0.4羽という結果が出ています。

2. 巣作り期

本当は、巣作りの前に、特定のオスとメスの間でつがい関係を結ぶ「つがい形成期」があるはずですが、ヤブサメの場合、非常に観察が困難なので、いつの間にかつがいになっていたというカップルばかりで、その間の詳しい状況はまだあまりよくつかめていません。ただ、オスが高い場所でさえずっているときに、下のササの中で「チッ、チッ」とか「チョッ、チョッ」という弱い声があります。その声があると、オスはサッとその声の真上の枝に移って、さかんにさえずりだします。このことから、おそらく下にいるのはメスで、今まさにさえずりオスのなわばりを通過中だったのではないかと想像がつかます。この時期、結構このような光景が見られることから、このようにしてメスは渡ってきたのちにオスがさえずっているなわばりを頻繁に通過しているものと思われる。そして、そのなわばりの条件(環境)が気に入ると、弱い声を出して、自分の存在をなわばりオスに知らせるのでしょう。その後、しばらくしてメスの声が聞こえなくなり、オスがまたあちこちで落ちつかないようにさえずりだすことがあります。おそらくメスの方の気が変わって、通過してしまったと思われます。そこでオスはまた、高いところから別のメスの通過を待たなくてはならなくなったのでしょう。このことから、ヤブサメのオスが高いところでさえずるのは、回りのオスを警戒するためばかりでなく、下の密生したササの中を通過するメスを見つけやすくしているためではないかと私は考えています。それが証拠に、しばらくして高いところでさえずらなくなると、ササの中の地上でメス(と思われる個体)のあとにくっついて、そのなわばりのオスがチョコチョコと一緒に餌をとっている光景を

見かけるようになります。さらに数日すると、今度はオスが先導して、メスがあとにくっついて、オスがさえずっていた範囲内を歩き回っている場に遭遇します。こうなると、巣作りは間近です。時折り、オスがメスに餌をプレゼントする現場も見られます。

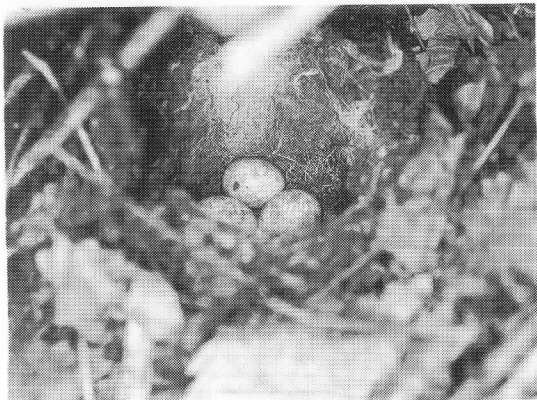


写真2 ヤブサメの巣と卵

巣作りは突然行われます。(少なくとも私にはそう感じられます)。オスとメスがかみつき離れず歩きながら仲よく餌を食べていたと思っていたら、突然メスが、その辺にある落ち葉をつぎつぎくわえ込み始めます。ある程度口にくわえたと思うと、なんの前ぶれもなしに一直線に飛んで行ってしまいます。オスがあわてて後を追います。飛んでいった方向に行ってみると、さかんにオスが私を警戒しますが、メスは無言で落ち葉をくわえたまま、ぐるぐると私の回りを歩き回ります。巣が近い証拠です。これからは、私の勘とテクニックの勝負です。なるべく早く巣を見つけてその場を去らないとせっかく作りかけている巣を放棄しかねません。

このようにして、運良く見つけられた巣は、たいていチシマザサ(ネマガリタケ)の根元にあります。また、ときには、大きな樹の根元だったり、歩道の斜面にある小さくほみだったりすることもあります。なぜ、ササの根元に作られる巣が多いのかということと考えますと、前年の秋に降り積もった落ち葉が、冬にはササとともに雪に押しつぶされます。それが、雪解けとともにササが立ち上がると、その根元に堆積した落ち葉と一緒に持ち上げられ、ササの根元に小さな空間ができます。これがヤブサメが巣を作るのにちょうどよい広さになっているわけです。そう考えて、あらためて林の中を見ると、あるわ、あるわ、具合の良さそうな場所がいたるところに見られます。少なくとも羊ヶ丘のヤブサメにとっては、我々が人間社会の中で住宅難だ、住宅難だと言っている悲痛なさげびは、きっと無縁のものに響いていることでしょう。

巣は、葉肉が溶けてしまって、ほとんど葉脈だけになった落ち葉を好んで外装に使います。落ち葉を口いっぱいほおぼっては運んできて積み重ねます。そして、その上に乗っておなかの部分で押さえつけ、そのままぐるぐる回ったりして、内側のきれいな円形の部分を形づくっていきます。そして、卵を置いて抱く部分となる産座には、少量の獣毛を敷いたりして、心地よいベッドのように仕上げていきます。これまでの観察では、つがいが形成されてから巣を作り始めるまで、平均して約12日かかっています。また、巣はすべてメスだけで作られますが、完成するまで平均で5日くらいかかります。オスはそのあいだ、メスにつきっきりです。別に手伝いをするというわけでもないのですが、巣と餌場の間を往復するメスにずっと付き合っています。ではメスは一日中巣作りをしているかということ、そうでもないようで、早朝から午前中にかけては、結構熱心に巣を作っていますが、午後になるとほとんどやめてしまいます。なかにはわずか2日で完成させた巣もありましたが、そこでは、さすがにメスが働き者で、ときおり私たち観察者も無視してしまうような個体でした。ですから、彼らの実力からすると、ほとんど1~2日で完成させてしまえるような巣なのに、多くの個体が、彼らにしてみれば結構時間をかけてじっくり作っているように見えます。

このようにして作られた巣の大きさは、内部の直径が約5.5cm、深さが約4cmといった小さくてかわいいものです。形は、俗に言うカップ型で上を向いているわけですが、前述したように、落ち葉や樹の根元部分がおおいかぶさるようになって、まるで屋根のようになっています。これは、雨風をしのぐ意味もあるのでしょうか、おそらく敵から巣をうまくかくしているようにも見えます。遠くから見ると、巣の両側と後ろは壁のようになっており、出口が前方のただ一カ所になっているように見えます。そこで、その前方の出口がいったいどの方角を向いているかを調べてみました。すると、もっとも多いのが北向きで、次いで北東や北西といった方角を向いた巣が多く、南を向いている巣はほとんどありませんでした。これは何を意味するのか。巣から少し離れてみると、納得がきました。北の方を向いて作られた巣は、一日中日の光が射し込まず、遠くから見ると単に暗くなった小さくほみとしか見えません。ところが、東や西を向いた巣では、一日のある時間帯に少し日光が射し込んできて、巣の形が丸見えになることがあります。とくにメスが不在で、卵だけの巣では、巣の存在は一目瞭然になってしまいます。そこで数少ない南向きの巣を注意深く見ると、巣の周囲がかなり密生したササでおおわれ、日光がほとんど地面まで射し込まない場所でした。

3. 産卵・抱卵期

実は、巣の完成というのは私たち人間の感覚ではわかりにくいものです。というのは、通常、メスは巣が完成するとすぐ産卵を開始するのですが、ある年、産座もすっかりしており、見た目にはほとんど完成品と見える巣でも、なかなか卵が産み込まれない巣が見られました。当初、これはまだ巣としての完成品ではなく、インテリアになかなかうるさいメスが、毎日、中を少しずつ手直ししているのだらうと思っていました。しかし、巣にはその後、メスが立ち寄った形跡もありません。その年は、そんな巣がいくつか見られました。すると、ある日突然、一斉にすべての巣に第一卵（初卵）が産み込まれていたのです。よく考えてみますと、その年は渡来期から巣作り期にかけて、比較的気温が高く経過しましたが、巣作りの後半当たりから、急に冷え込んだ日が続いたのです。そして、一斉に初卵が産み込まれた前日は気温が上昇し始めた日でした。このことから、産卵開始は気温条件にある程度左右されていることが予想されました。

産卵後のヤブサメは、とくに観察が困難になります。オスメスともにほとんど声を立てず、私が近くに寄っても、ただこそこそと逃げるだけです。よっぽど耳をすま

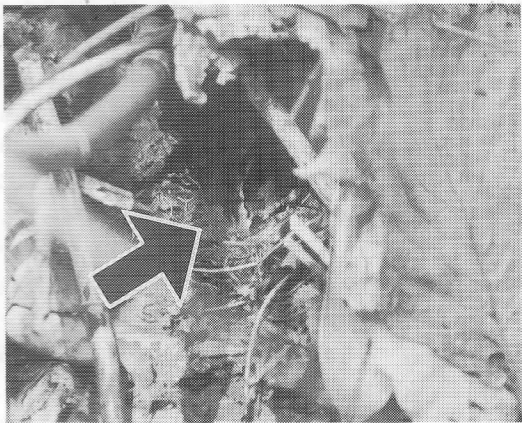


写真3 抱卵中のヤブサメ。みごとな保護色

せて、落ち葉に彼らが触れて出すかすかな音を聞き分けないと、彼らの存在自体まったくつかめません。ヤブサメの観察には、するどい観察眼はもちろんのこと、かすかな音による定位が重要なカギとなります。

ヤブサメは他の大部分の小鳥と同じように、毎日1卵ずつ規則的に産みます。卵を産む時刻はほとんど早朝です。というのは、夜明け直後（4時ころ）に巣中の卵数を数え、ついで7～8時にメスがいないのを見計らってもう一度のぞくと、たいいてい卵が1個増えているからです。ヤブサメの1巣あたりの卵数（一腹卵数）は、4～6個ですが、最初に作る巣ではほとんど6個のようです。

最終卵を産み終えると、メスはすぐに巣にすわって抱卵し始めます。このころになると、私は巣の前方にビデオカメラを設置します。巣の前で、人間が始終観察していると、抱卵中のメスのストレスにもなるし、へたをする



写真4 巣の前に設置したビデオカメラ

と捕食者（キツネやネコなど）を誘導しかねないからです。カメラをしかけた当初は、少々気になるようですが、ずっと身じろぎもしない機械には、すぐに慣れてしまうのか、ほとんど気にしなくなります。自然の一部として認識しているのかもしれませんが。カメラには、雨よけのフードとその上に迷彩のカバーをつけます。目立つカバーでは、かえってカラスを誘引すると思われるからです。このようにしてビデオによる長期間の記録をとってみると、面白いことがわかってきます。

ヤブサメの卵は、白色の地に、うすい赤もしくは赤褐色の斑点がついています。直径1.5cm、短径1cm、重さは約1gという、それはそれはかわいらしいものです。フ化したてのヤブサメは、シジウカラのそののちょうど半分くらいの重さです。抱卵期間は平均して13日間です。メスは、抱卵期には日中のなんと8割くらいの時間を抱卵に費やします。しかし、大体1時間に1回くらいの割合で、約20分くらいの外出を行います。当初私は、1時間抱卵するとおなかが空くので、定期的に餌をとりに行くのかと思っていましたが、これは、どちらかというともメスの生理現象が原因ではないかと思うようになりました。というのは、オスは抱卵中期から後期にかけて、一日に1～2回巣を訪れ、メスに餌をプレゼントします。しかし、その餌をいっぱいもらった直後にもかかわらず、メスが巣を離れることがよくあるのです。これは、おなかが空いたからというより、別の原因のほうが考えやすいと思います。

抱卵中のメスの羽色は、またみごとに保護色の役割を果たしています。敵が近づくと、メスは巣の中で体を縮め、黒っぽい過眼腺を巣の縁に合わせた形でじっとして

います。そうすると、体の褐色が回りの地面の色とけ合い、さらに眉斑の白が地面に落ちた木切れの模様とそっくりになってしまいます。そして、巣の縁からじっと敵が通り過ぎるのを待つのです。これは、巣に近づくとやたらとさわぎたてるアオジやコリなどと際だって異なった特徴です。彼らは、敵が比較的遠いうちからいきなり飛び出していきます。まるで、ここに巣がありますよと言わんばかりの行動です。一方、ヤブサメは敵がかなり近くに来るまで、じっとして動きません。まさしくほんの10cm足らずの場所まで接近してはじめて逃げるのがしばしばです。したがって、抱卵中のヤブサメの巣はほとんどといってよいほど見つかりません。

4. 育雛期

卵は、抱卵を開始して14日目からつぎつぎフ化し始めます。ビデオで見ていると、いままで落ちついてすわっていたメスが、おなかの下を気にしながら、さかんに立ち上がるようになり、卵をクチバシで動かしたりします。しばらくすると、メスが割れた卵の殻をくわえてむしゃむしゃと食べ始めるシーンが見られます。これはほとんど例外なく起きることで、卵の殻を巣の外に持ち出す例はひとつもありませんでした。また、オスが卵殻を食べるのも見られないので、これはおもに、メスのカルシウム補給の一つの方法として行っているものと考えられます。後に述べますが、ヤブサメは羊ヶ丘では通常年に2回繁殖することから、他の年1回しか繁殖しない鳥に比べて、かなりのカルシウム補給が必要になっていると思われる。そういったビデオのシーンから、卵がフ化した時刻を推定することができます。それによると日中(夜明けから日没まで)に全体のほぼ8割の卵がフ化したことがわかりました。したがって他の卵は、夜間か、夜明け直前などの真っ暗でビデオにうつらない時間帯にフ化したものと思われる。また、フ化は早朝(4~7時)と午後(13~16時)に行われることが多く、8~12時には比較的少ないという結果が出ました。しかし、これらはそれほど意味のある違いではないので、フ化時刻は特に決まっていなくて差し支えないと思います。一方、一つの巣の中ですべての卵が同時にフ化するわけではありません。最初の卵がフ化してから、すべての卵がフ化し終わるまでの時間を測ってみると、平均して約15時間、おそいもので丸々1日遅れでフ化したものもありました。この違いはどこから来るのかははっきりしたことはわかりませんが、抱卵開始は最終卵を産み終えたと同時にですから、あたためている期間はすべての卵で共通のはずです。巣の中でどのような位置にあった卵なのか(たとえば常にメスのおなかの直下にあったものと、

脇の方にあったものの違い?)、もしくは単なる個体による特徴が出ただけなのかもしれません(せっちなヒナとのんびり型のヒナ?)。

一方、大変面白いことに、巣立ちは1つの巣の中でほとんど同時に起きます。最初のヒナが巣を飛び出してから、最後のヒナが出るまでの時間をビデオから計算すると、平均でなんと1.7分という結果が出ました。たとえカラから出るのに多少差があっても、巣から出行くのは兄弟で一緒なんです。

オスは、フ化と同時にせっせと餌を運び始めます。ヒナが巣立つ日まで、オスは実によく働きます。ヒナが日を追って成長するに伴って、求める餌の量は当然多くなります。フ化日には、1時間当たり2回くらいの給餌で済んだものが、巣立ち前日にはなんと1時間当たり10回を越えてしまいます。これが一日中ですから、5~6分に1回の割合で、しょっちゅう餌を運んでやっていることとなります。また、オスの餌運びは、日中の決まった時間に多くもってくるということでもないようです。確かに朝と夕方に若干餌量が多くなる傾向は見られますが、ほとんど意味のない違いであり、オスは一日中、のべつまくなしヒナへ奉仕していることとなります。

ではその間、メスはどうしているかというと、これまたなんと、抱卵中と同じように巣の中にすわったままで悠然としているだけです。これは、フ化直後はヒナの体温調節機能がまだうまく働いていないので、外から保温してあげなくてはいけないからです。しかし、それでもメスは1時間半~2時間に1回くらいの割合で、やはり20分程度の外出をします。外出から帰ってくると、口に餌をくわえていることもあれば、何も持たずに帰ってくることもしばしばです。たいていの場合、ヒナへの餌やりは、まったくオスにまかせっぱなしといった感じです。メスの抱雛時間(巣の中でヒナを抱いている時間)は、巣立ち前々日でも日中の約半分にも達します。このころになると、ヒナも十分大きくなり、目もパッチリあいて、ウブ毛ならぬ幼羽で全身がおおわれてきます。もうそれほど体温保持の必要性もなくなったように見えます。しかし、それでもメスはしつこくヒナを抱こうとします。ヒナのほうが完全にいやがって巣の中でごそごそとうごめいています。しかたなく、メスは巣の縁に足をかけて、ほとんど股裂きの状態で、なお巣の中に居続けます。この執着はいったいどこから来ているのでしょうか。意外と、ここにヤブサメの種としての特徴の一つがあるのかもしれない。

ヒナへ与える餌は、ビデオの映像からある程度同定できます。それによると、餌のなかで最も多いのは、チョウヤガの幼虫(すなわちイモムシの仲間)でした。それが全餌数の35%くらいを占めます。つづいてクモの仲間

(20%)、ハエヤカの仲間(13%)となっていました。しかし、これらは全部、親鳥が巣にもってきた数で計算していますので、イモムシの大きさがクモやハエより非常に大きいことを考えると、実際にはイモムシがヒナの餌の全体量に占める割合は8~9割くらいになるのではないかと考えられます。また、同じベアーでも最初に作った巣のヒナに与える餌と2回目に作った巣のヒナへ与える餌とは、少々質が異なっています。というのは、2回目でもやはりイモムシが最も多いという傾向は変わらないのですが、ガの成虫をもってくる割合が急激に増加し、ハエヤカの仲間のそれを超えてしまいました。これは、2回目の繁殖が7~8月に行われるために、それまで幼虫だったガが羽化して周囲を飛び回り、比較的手に入れやすくなったためと思われる。

これまで述べてきた餌は、単にヒナへ与える餌です。ではたして親鳥もこれと同じようなものを同じ割合で食べているかという点、どうもそうではなさそうです。成鳥の餌を押し量るのは至難の技ですが、じっくり観察していると、少しずつわかってきます。それによると、もっとも多いのはクモとアブラムシのようです。ヤブサメは地上を歩いていて、ときおりササの茎や葉を見上げることがよくあります。そして、葉っぱの裏や、茎にジョンと飛び上がって何かをつかんで食べています。私もまねをして、ササの葉や茎を調べてみました。すると、ササの葉っぱから茎にかけて斜めに網をかけているクモが実に多いことに気づきます。また、茎に小さなアブラムシがへばりついています。彼らは得意の大きな目で、容易にこれらの餌を見つけてとっているものと思われる。また、アリも結構食べていると思われるふしがあります。しかし、統計処理できるほどのデータはまだ揃っていないので、成鳥の餌については、今後の課題として残っています。

5. 巣立ち期

巣の中のヒナは平均して10日で巣立ちの日を迎えます。巣立ちには、突然起こることが多いようです。一般に、鳥類ではなかなか巣立ちできないヒナを親鳥がうながす、たとえばわざとおなかを空かせておいて、餌で外におびきだすといったシーンがよく見られますが、ヤブサメの場合は、ほとんどそのようなことは見られません。オスが餌を運んで来てヒナに渡し、巣を離れた瞬間に、バタバタとヒナたちもついて行ってしまったり、それまでヒナを抱いていたメスが巣を出ると、それについて行ったりとか、ひどいのは、何が原因かさっぱりわからず、突然ヒナの1羽がチョコチョコと外に出てしまい、それにつられてあとのヒナたちも三々五々少しずつ出て行った

りと、このように巣立ちの形式は様々です。ヒナたちの巣立ちが親による意図的な影響ではないということは、ヒナが巣立つ前後のビデオの映像を見るとよくわかります。すなわち、ヒナが巣立ってカラッポになった巣に、しばらくするといつものように口いっぱい餌をくわえた親鳥がやってきて、巣の中を見て、驚いている様子が(?)映っているのです。ひどいのは、しばらく首をかしげながら巣の中を探し回ったあげく、一旦外に出たと思うと、2~3分後に再び戻ってくることもあります。もちろん、餌はまだ口いっぱいになったままです。これは、他の樹上性もしくは樹洞性の鳥類と異なって、巣立ちだからといって、それほど強い飛翔力を必要としないところから来ているものと思われます。すなわち、巣立ちといっても、ヤブサメのヒナたちにとっては巣から少し外出したくらい感覚で十分だと思われるからです。確かに、ヒナたちは巣立ち直後は、無理をすれば10メートルくらいは一気に飛べますが、通常はほとんど一カ所にかたままって動こうとしません。ときおり「チー、チー」というかすかな声を上げて、親を呼びます。巣立ちして2~3日は、ほとんど前日と同じところで幼鳥のかたまりに出会います。それから、親鳥が少しずつヒナを連れて移動し始めます。だいたい1週間くらいは親のなわばり内をあちこち移動して歩きます。このころになると、ヒナがときどき地面をついばむしぐさを見せ始めます。それまでは、斜めになったササの低い茎に止まり、正面からやや上方の方を向いてただ「チー、チー」とわめいて、餌をねだっていたのですが、自分から餌をとる練習をし始めたと思われる。巣立ち後10日くらいたつと、地面をついばんだあとで餌を飲み込むしぐさも見せます。立派に自分でも餌をとれるようになった証拠です。

親鳥、とくにオス親は巣立ち後平均すると11日くらいはせつせと巣立ちヒナへの給餌を行います。一方、メス親は巣立ち後約4日くらいはヒナたちに付き添っていますが、その後はこつぜんと姿を消します。ほとんどの場合、彼女は最初のヒナたちの世話を夫にまかせて、あたらしい2回目の巣作りにかかっています。巣は決して同じものを利用するということはなく、全く新しく作り始めます。新しい巣は、前回のものと20メートルくらいしか離れていないこともあれば、200メートル以上離れている場合もあります。この2回目の巣作りは前回のものと比べて、私たちににとっては格段に探しにくくなります。というのは、オスが巣立ちヒナの世話に一生懸命になっているので、メスはほとんど1羽でこそそこそと巣を作り上げてしまうからです。最初の巣は、一緒に付き添うオスがかなり警戒するので、だいたいの見当は付くのですが、1羽でこっそりやられてはお手あげです。そういう中で、2回目の巣を見つけたときは、本当に祝杯のもので

す。

巣立って2週間くらいたったヒナたちは、自分たちだけで集団を作って少しずつ移動していきます。完全に親から独立したものと思えます。このころになると、親のなわばりから遠く離れることも多く見られます。ときには、隣り近所で巣立ったヒナを引き連れた他人の親鳥と出会うことがあります。すると不思議なことに、どうみても他人なのに、その親鳥からちゃっかり餌をもらってしまうことがあります。成鳥が寛容なのか、ヒナの要領がいいのか、はたまた親鳥は「チー、チー」とわめいているヒナには誰でもいいから餌をやりたくなるのか。横で見ていると実にほほえましくなる情景です。

そのうち、森の中からヒナ特有の声が聞こえなくなり、するどい「チチッ、チチチッ」とか、「チョッ」とかいった声がさかんに聞こえるようになります。林道を歩いて



写真5 育雛中のヤブサメオス(右)とメス(左)

いるすぐ横で、いきなり鳴かれるとドキッとしますが、よく見ると幼鳥です。もうほとんど成鳥と羽色も体型も変わりませんが、やや黄色がまだ残った少し小さなクチバシからすぐわかります。飛翔力も成鳥顔負けです。もう立派に渡る力を備えているのかもしれませんが。

親鳥たちは、また2回目の繁殖を前と同じようなスケジュールで淡々とこなしていきます。ただ、今回は一腹卵数がやや少ないのが特徴です。卵数がだいたい5個の巣が多く、4個の場合もありますが、6個の巣はほとんどなくなります。ヒナへ与える餌の条件がだんだん厳しくなることへの適応と思われる。

6. 渡去期

いままで述べたヤブサメの繁殖生活は、だいたい7月下旬に2回目の巣からヒナが巣立ちますので、それらが一人立ちする8月の中旬には一応区切りがつくものと思われれます。そうすると、今度は南へ渡る準備が始まりま

す。私の調査地では、8月の末から渡り鳥の捕獲、標識装着作業を始めますが、もうすでに最初からヤブサメがよくかかります。当初はそれでも、今年生まれの見覚えのある個体(?)が再び捕まったりもしますが、9月の初旬になるとほとんど新しい個体ばかりになります。これは、ヤブサメの渡りが本格的に始まったことを示しています。ヤブサメがもっとも多く捕獲されるのは9月の中旬で、それらがポツリ、ポツリといった状態ではそばそと捕まるくらいになり、10月中旬にはもう何日かに1羽といった調子でしか捕まらなくなり、下旬にはまったく捕獲されなくなります。すなわち、ヤブサメの渡去は、9月始めに開始して、中旬にピークを迎え、10月中旬までで終了するというパターンが一般的のようです。

おわりに

以上が羊ヶ丘におけるヤブサメについて私が調べた一般的な繁殖生態です。しかし、ヤブサメという鳥は、実は一筋縄ではいかない面をまだ、いっぱい持っています。他の日本産鳥類、いや世界的に見ても特異的と思える生態を示す部分があることが少しずつわかってきています。そのことについては、また機会をあらためてご紹介したいと思っています。

最後に、私に6年間ものあいだ感動を与え続けてくれた羊ヶ丘のヤブサメたちにここで深い感謝を捧げたいと思います。彼らは、実に辛抱強く私の研究に付き合ってくれました。ある時は迷惑そうに、またある時はまるで私を無視しているかのように……彼らが協力してくれたおかげで、いくつか学術論文を発表することができました。それによって私もかろうじて生活の糧を得ております。また、この研究を進めるにあたり、数多くの方々にお世話になっております。とくに捕獲調査に積極的に協力していただいた広川淳子、三木昇、浜田強の各氏には大変感謝しております。さらに研究のよき助手として、またよきアドバイザーとして常に私を支えてくれている妻仁子にも、この場を借りて感謝したいと思っています。また、ヤブサメについて、このように広く会員の皆さんにご紹介する機会を与えてくださった森田新一郎、富川徹の両氏、ヤブサメの見事な写真をこころよく提供いただいた山田良造氏にも深甚の意を表したいと思っています。

北海道では、一部の地域を除き、季節になれば比較的簡単にヤブサメに出会うことができます。これを機会にヤブサメと親しい付き合いをされる方が増えることを希望しています。

〒062 札幌市豊平区羊ヶ丘7 森林総合研究所

平成7年度総会報告

日時：平成8年4月13日（土）午後2時～4時

場所：札幌市民会館 第2号会議室

柳澤会長の挨拶のあと、議長に小堀煌治氏を選出し、議案審議が行われ原案どおり承認可決された。

<議事>

1. 平成7年度事業報告

[総務]

(1) 野鳥写真展

- ・たくぎん自動サービスフロア（7. 5. 8～27）
- ・たくぎん札幌西支店ロビー（7. 6. 1～30）

(2) 野鳥だよりの発送（100号～103号）

(3) 創立25周年記念講演会（7. 5.20）

講師 正富宏之氏

(4) 会員名簿の作成（7. 8.31現在）

(5) 愛護会名入りカレンダーの作成 100部

(6) 新年懇談会・スライド映写会（8. 1.13）

講師 川辺百樹氏

(7) 定例幹事会の開催（毎月第一水曜日）

(8) 障害保険の更新

[広報]

野鳥だより 100号～103号の発行

[探鳥]

探鳥会の開催（20回 参加者延べ 657名）

歩きましょう（8回 参加者延べ 141名）

[会計]

(1) 平成7年度決算報告

(2) 平成7年度会計監査報告 大野信明、佐々木武巳
監事の適正に処理されている旨の報告があった。

2. 会則の一部改正について

[改正前]

(会員及び会費)

第5条 本会の会員は、会の趣旨に賛同する個人または団体をもって構成する。本会の会費は、年額個人2,000円、団体5,000円とする。

[改正後]

(会員及び会費)

第5条 本会の会員は、会の趣旨に賛同する次の会員をもって構成する。

平成7年度決算書

(収入の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減 (A-B)	摘要
繰越金	121,863	121,863	0	
個人費	874,500	820,000	54,500	平成8年度以降の前受分を含む
団体費	5,000	10,000	△ 5,000	1団体（猟友会）
寄付金	34,000	10,000	24,000	正富氏ほか
参加費	68,500	50,000	18,500	講演会、探鳥会参加費ほか
売上金	184,000	180,000	4,000	野鳥だより(180,000円)、タイピンほか
雑収入	7,353	8,137	△ 784	利息ほか
合計	1,295,216	1,200,000	95,216	

(支出の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減 (A-B)	摘要
印刷費	567,736	600,000	△ 32,264	野鳥だより(4回発行) 会員名簿ほか
通信費	241,990	200,000	41,990	だより発送費ほか
会議費	53,470	110,000	△ 56,530	幹事会、総会の室使用料等
消耗品費	10,525	50,000	△ 39,475	封筒代ほか
交通費	73,250	70,000	3,250	だより発送、探鳥の交通費
報償費	66,089	90,000	△ 23,911	事務所謝礼ほか
雑費	97,788	70,000	27,788	障害保険、写真展ほか
予備費	0	10,000	△ 10,000	
合計	1,110,848	1,200,000	△ 89,152	

(収支の部)

(収入) (支出) (残高)
1,295,216 - 1,110,848 = 184,368

内訳 会費仮受分 146,000 (73件)
繰越金 38,368

- ① 個人
- ② 家族（会員として届け出た者に限る）
- ③ 団体

本会の会費は、年額個人2,000円、家族3,000円、団体5,000円とする。

なお本会則は平成8年度より施行する。

家族会員制度新設については、諸会の会員制度を勘案し選択肢を拡げようとするものである。家族が夫々個人会員である現行を、家族単位で加入できるシステムに改め、写真展その他行事への積極的な参加を期待します。

3. 平成8年度事業計画

[総務]

- (1) 新年講演会、スライド映写会（平成9年1月中）
- (2) 野鳥写真展
 - ・たぐざん自動サービスフロア（8. 5. 8～27）
 - ・たぐざん札幌西支店ロビー（8. 5. 29～6. 24）
 - ・ほくでんエレナードギャラリー（8. 6. 26～7. 2）
- (3) 野鳥だよりの発送（104号～107号）
- (4) 定例幹事会の開催（原則として毎月第一水曜日）
- (5) 愛護会名入りカレンダーの作成

- (6) 野鳥だより郵送用封筒の作成
- (7) 障害保険の更新

[広報]

野鳥だより 104号～107号の発行

[探鳥]

探鳥会・20回、歩きましよう・8回

なお12月8日の小樽港探鳥会はバス手配などの関係から、本年度より「申込制」といたしますので、予めお含みおきください。細目は本誌にて後日掲載。

[会計]

平成8年度予算

4. 役員の選出

白澤代表幹事から小樽の幹事として長年にわたり、当会のために尽された故中野高明氏に哀悼の意が表され、渡辺俊夫氏と協議の結果として梅木賢俊氏に後任役員就任を要請、快諾された旨の報告があり、また新役員に中正憲佑氏の推挙があり、夫々就任されました。

梅木賢俊氏（小樽）探鳥幹事就任

中正憲佑氏 総務幹事就任

なお、柳澤会長、小堀副会長をはじめ、現役員は全員留任いたしました。

平成8年度予算書

(収入の部)

項目	前年度 予算額	予算額	摘要
繰越金	121,863	38,368	会費返受分は個人会費に計上
個人会費	820,000	740,000	2,000×370人
家族会員	0	60,000	3,000×20家族
団体会費	10,000	10,000	5,000×2団体
寄付金	10,000	10,000	
参加費	50,000	55,000	新年懇談会 藤の沢探鳥会ほか
売上金	180,000	180,000	野鳥だより、タイピン
雑収入	8,137	6,632	利息ほか
合計	1,200,000	1,100,000	

(支出の部)

項目	前年度 予算額	予算額	摘要
印刷費	600,000	550,000	野鳥だより、郵送用封筒ほか
通信費	200,000	200,000	だより発送費ほか
会議費	110,000	80,000	会館使用料・幹事会ほか
消耗品費	50,000	40,000	コピー、事務用品
交通費	70,000	70,000	野鳥だより発送、探鳥会幹事用等
報償費	90,000	90,000	事務所、講師謝礼ほか
雑費	70,000	70,000	障害保険、写真展ほか
予備費	10,000	0	
合計	1,200,000	1,100,000	

※会員数

項目	6. 4. 1	7. 4. 1	8. 4. 1
個人会員数	422名	410名	400名
団体会員数	3団体	2団体	2団体



円山公園探鳥会

8. 3. 3

矢野 玲子

今年は何と雪が多いのでしょうか。毎日朝から晩まで除雪に追われ、体のふしぶしの痛さに鳥をみるのをすっかり忘れていました。でももう3月、円山公園では鳥たちの動きが活発になり、いろいろな発見があるに違いありません。久しぶりに探鳥会に参加することになりました。出掛ける頃からまた湿った雪が降り出してきました。公園の中は例年より雪は多いけれど、遠くからゴジュウカラの複雑なさえずりも聞こえ、餌台の後のヤナギはわずかながら白い帽子をのぞかせ、確実に春は近づいています。

大きなニセアカシアに群がる凡そ20羽の鳥。尾に切れこみがあり、腹にしま模様が見える、スコープで見るとハギマシコです。雪混じりの曇天では残念なことにあの赤紫の美しい色を見ることはできません。

神宮の表参道に出た頃雪がだんだん激しくなって、鳥の姿をとらえることができなくなってしまいました。

それで心ならずも1時間半程の探鳥で終わることになりました。

朝集合した円山公園管理事務所前に戻り鳥合せをしました。その最中に目の前のカラマツにエナガが現れ、探鳥会の締め括りをしてくれました。

〒001 札幌市北区屯田3条1丁目5-1

[記録された鳥] コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、マヒワ、ハギマシコ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシブトガラス、ドバト、シメ 以上17種

[参加者] 相木孝子、今泉秀吉、犬飼 哲、小川祐子、国鳥達夫、佐々木泰夫、白澤昌彦、田中一儀、田子元樹、武沢和義・佐知子、野坂英三、服部光博、榛葉貴博、三船喜克・幸子、柳澤信雄、矢野玲子、山田良造 以上19名

[担当幹事] 武沢和義、矢野玲子

ウトナイ湖探鳥会記録

8. 3. 31

[記録された鳥] アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガ

モ、オナガガモ、ホシハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、セグロカモメ、ユリカモメ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシブトガラス、シメ 以上29種

[参加者] 後木建一、板田孝弘、井上公雄、今泉秀吉、犬飼 弘、緒方道子、木村与吉、黒畑寧子、後藤義民、霜村耕介、田子元樹・園江、中正憲佑・弘子、富田寿一、永島良郎、榊川 保・弘子、森田新一郎、山田甚一・玲子 以上21名

[担当幹事] 富田寿一、永島良郎

野幌森林公園探鳥会

8. 4. 14

田子元樹

4月14日、晴天に恵まれた野幌森林公園での探鳥会に参加させていただきました。9時に大沢口に集合し約50名ほどのBIRDER達が集まりました。

幹事の山田氏より注意事項の外、留鳥と冬鳥達が見られるとの説明があり、夏鳥などの姿はまだ見られず少しさみしい時ですがゴジュウカラなどのカラ類の囀りの中での探鳥会となりました。

大勢の人数で歩き出し、もうすぐやってくる鳥の話、「早くカワセミに会いたい」だの、「もうホオジロ見たよ」とか、今シーズンの西岡公園でのミヤマホオジロの話などの情報交換をし楽しい時間が過ぎて行き、マヒワ、アトリ、キレンジャク、ヒレンジャクの美しい姿を見ることが出来ました。昼食後、クマゲラも登場し（僕は見られなかったので残念。）カラ類、キツキ達も厳しい冬をのり越え春の準備をしているようでした。楽しい時をありがとうございました。

大沢口近くの木の下でフクロウのペリット（未消化物を固めて吐き出した物）を持ち帰りました。3個を水で溶きほごしたところ、ネズミの骨が4匹分はっていました。

〒063 札幌市西区西野2条6丁目3-60-101

[記録された鳥] アオサギ、トビ、ノスリ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ヒレンジャク、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上26種

[参加者] 五十嵐加代子、犬飼 弘、今泉秀吉、井上公雄、大槻日出、大沢真琴、大町欣子、岡田 実、小野木弘司・幸子、笈田一子、香川 稔、柏葉 明、栗林宏三、

後藤義民、佐々木玲仁・ちさと、清水朋子、志村二郎、菅谷英司・明美・彰太・優里、須田 節、高栗 勇、高橋初美・みゆき、田子元樹、武沢和義・佐知子、竹中昭雄・悦子、田鍋キクエ、戸津高保、戸鼻 篤、中江登美子、中正憲信・弘子、永島良郎、永田秀男、樋口孝城・陽子・和子、三谷信一郎、森 茂太・純子・林太郎、山田良造、柳沢信雄・千代子、吉田、恵花 以上52名

〔担当幹事〕山田良造、栗林宏三

合同探鳥会の宮島沼

8. 4. 21 坂本尚子

4月21日、おそい春の小雪の舞う中、日本野鳥の会滝川支部、北海道野鳥愛護会、二つのグループの合同探鳥会が美唄の宮島沼で初めて行われました。いつもの年ですと、沼の水も融けているのに、今年は寒かったので白一色、岸辺のわずかな水辺にオオハクチョウが、4~50羽程雪の上で餌を食べていました。毎年この時期ここに来ているのですが、今年は特に一般の人達の多い事、すっかり有名になった宮島は、交通整理をする程の混雑ぶりでした。曇っていた空も、時間とともに晴れ渡り、青空に飛び立つオオハクチョウの姿の美しい事、おまけに雪をいただいた山の稜線がくっきり映えて、木々の一本、一本がまるで墨絵のようで見ると人を魅了せずにはいられない程でした。

それぞれのグループは皆、鳥大好きな集まりだから、初めてお会いする人達でも、本当に自然に言葉をかわす事が出来るものです。毎年一度は来ている宮島沼は、何度来て見ても、見る者をあきさせる事がない所です。

人おじしないオオハクチョウ、神経質で人を寄せつけないヒシクイ、愛らしいキンクロハジロ、美しいオナガガモ、ものすごい数のマガンの群、今年は残念な事に、これらの沢山の鳥を見る事が出来ませんでした。せっかくの合同探鳥会も、雪が多くて、ハクチョウ以外の鳥達は、近くの水田に散って、餌を食べていました。

ヒシクイの中にカリガネが1羽交じっているとの情報がありましたが、私達滝川グループは見つける事が出来ませんでした。あと一週間程ずれていたら、沢山の冬鳥が見られたのと思うと本当に残念です。

マガンや、ハクチョウの飛び立つ羽音を聞いて、人も鳥も長い冬が終わり、待ちわびた春が来た事を感じます。毎日空を見上げると、ハクチョウやマガンの渡りが見られるけれど、北へ帰って行く鳥たちの無事を祈らずにはいられない気持ちです。又、いつか合同探鳥をぜひ実現させましょう。札幌野鳥愛護会の皆様方、本当にありがとうございました。

〒073 滝川市二の坂町東1丁目8-7

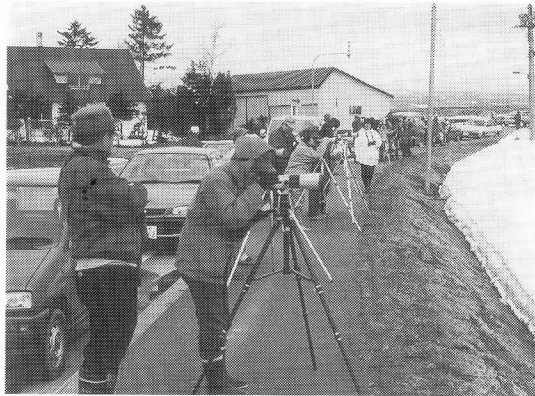
(日本野鳥の会滝川支部)

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オジロワシ、ノスリ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、カリガネ、マガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、アオアシシギ、カモメ、シロカモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 以上27種

〔参加者〕泉屋宜志・恵津子、伊東、岩淵、越後 弘、小野木弘司・幸子、大森千歳、香川 稔、柏葉 明、蒲原鉄太郎・則子、鎌田、小堀煌治、近藤幸友、坂本尚子、佐藤誠子、齋藤、坂地、清水朋子、辻 正一、友成、中正憲信・弘子、浜田 強、広川淳子、富久尾、星子廉彰、前田信義、前田涼子、真壁スズ子、森田新一郎、柳澤信雄・千代子、山田良造、若林信男 以上36名

※本探鳥会で一緒に行動した員数は約50名であった。

〔担当幹事〕山田良造、中正憲信、(滝川支部) 越後弘、坂本尚子



宮島沼探鳥会

とっしょうざん 突哨山・カタクリの群落を訪ねて

—余白をお借りして— 編集子

4月29日、このカタクリの群落がゴルフ場開発で一瞬にして消滅してしまう危機感と、永久にこのままであって欲しいという祈りの念で訪れた。シラカバの林のなかでカタクリはもうピンクの花を開き始めていた。

カタクリの群生のなかにエゾエンゴサク、エンレイソウ、バイケイソウ、ザゼンソウなどもみられ、ナニワズも黄色い花をつけている。曇天で寒い午後であった。

ベニヒワが目の前にあらわれた。シラカバ林には、エナガが二羽、コゲラ、ヒガラ、ハシブトガラ、アオジたち。ツグミの声。どこでも常連のヒヨドリ、トビ、ハシブトガラス、カワラヒワたちも律儀に姿をみせる。

旭川や地域の方々による突哨山のカタクリの保全、保護、存置のための運動が展開されていると聞いている。一度消滅したらカタクリは再びこの地で蘇らない。

ようこそ北海道に!!

一渡り途中のご挨拶— 編集子

◆タゲリ

後志管内古平町、古平川河口に飛来。オスばかり3羽。チドリ的一种で体長30cm、頭に黒い冠のような羽を持つ。同町在住の中村良助氏が4月26日に発見。(4月29日、道新夕刊)



タゲリ

◆ナベヅル

苫小牧東部工業団地内柏原に。体長は約1mで首は白く頭部が赤い。苫小牧の会員佐藤正秀氏が4月4日早朝に確認、撮影した。表紙の写真をご覧ください。(4月6日、道新朝刊)なお、ナベヅルの飛来については続報がありました。

◆クロウタドリ

渡島管内松前町白神岬に飛来。ツグミの仲間与国内には生息しない。全国で2例目。両翼の長さ43.2cm、体長25.4cm、オスの成鳥。全身が黒で、くちばしは黄色。福島町の会員・林吉彦氏が渡り調査中の4月7日AM6時ごろ発見した。(4月9日、道新朝刊)

◆コジュリン

渡島管内七飯町大沼国定公園で、道内では初めて保護された。オスの成鳥で体長15cm、ホオジロの仲間、オオジュリンは同類。環境庁の委託で標識調査をしている田中正彦氏(次項の発見、確認者でもある。)のカスマ朝にかかった。(4月14日、道新朝刊)

◆マミジロタヒバリ

渡島管内大野町白川で5月13日夕に確認された。全国で5例目。道内ではこれまで、'93年5月と'95年5月にいずれも渡島大島で確認されている。体長は18cm、つめが長く伸びているのが特徴。オスで生後1年とみられる。前掲の田中正彦氏により確認された。(5月15日、道新朝刊)



【鶴川】

平成8年8月25日(日)

9月8日(日)

北極圏が主な繁殖地であるシギチドリ類は、短い夏を過ごして早くも越冬のため南下をはじめています。鶴川の河口や干潟草地で憩うメダイチドリ、コチドリ、ソリハシシギ、オバシギ、ハマシギなどのほか、アジサシの軽快な飛翔やダイビング、チュウビの姿も観察されます。

集合=9時30分 JR鶴川駅前

交通=道南バス(札幌駅前ターミナル発 8時、浦河ゆき、鶴川駅通り下車)。

【鏡沼・宮島沼】平成8年10月13日(日)

水田地帯の林に囲まれた鏡沼。禁猟区になっていますのでカモ類が多く集まり、カイツブリも間近に観察できます。

宮島沼はミミ・ハジロ・アカエリ・カンムリカイツブリなど各種のカイツブリがみられます。カモ類は若鳥、エクリプス(非繁殖羽)の鳥が多い時期ですので、識別には良い勉強になるでしょう。

集合=10時 大富会館前

交通=中央バス岩見沢ターミナル発月形ゆき、大富農協下車、徒歩15分

【野幌森林公園】平成8年10月20日(日)

紅葉の季節、秋の自然を満喫しながらの探鳥会になります。渡り遅れの夏鳥と、早めの渡りの冬鳥が同時に観察されるのもこの時期です。渡り遅れのメジロ、ルリビタキ、気の早いツグミ、キレンジャクの姿も楽しみです。良い天气に恵まれます。

集合=9時 大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス 新さっぽろ駅バスターミナル発「文京台西ゆき」大沢口公園入口下車、徒歩5分。

※夕鉄バス発車時刻: 8時8分、8時48分。

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成8年9月15日(日)、10月6日(日)

集合=9時 大沢口駐車場入口

交通=上記をご参照ください。

★いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

★公共交通機関を利用される方は、各自で調査確認をお願いいたします。

★昼食、雨具、観察用具、筆記用具をご持参ください。

★探鳥会の問い合わせは011-851-6364柳沢宅まで。特に鶴川探鳥会るとき雨天・曇天の場合はゴム長靴を用意されると無難です。

鳥民だより

◆平成8年度年会費の納入について

平成8年度からの年会費につきましては、総会報告のとおり家族会員制を設けることになりました。

個人会員2,000円、家族会員3,000円

- (1) 家族会員となられるご希望の方は、別添の「払込取扱票」の通信欄にその旨をご記入下さい。また、構成員となられる方（複数の場合も）のお名前を併せてご記入下さい。

従来個人会員となっておられる方々で家族会員への切り換えをされる場合も、左記を援用して下さい。

- (2) 「会費の納入状況について（別添）」を会員各位ごとにお知らせいたしました。すでに納入済みの方などで、記入事項に誤りがありましたらご容赦下さい。なお、本票作成は6月5日現在です。
- (3) 年会費の納入につきましては「払込取扱票」により最寄りの郵便局にお振り込み下さい。

会 員 名 簿（追補）

（平成8年5月31日現在）

〔新しく会員になられた方〕

尾田和夫	831-2004	062	札幌市豊平区平岸7条17丁目5-24
竹村由男	841-4689	005	札幌市南区澄川4条3丁目5 あべハウス
笈田一子	881-8408	004	札幌市豊平区平岡4条3丁目45-76
加藤喜七	0144 74-8825	053	苫小牧市有珠の沢町4-5-14
小淵修子	893-6309	004	札幌市厚別区厚別中央2条4丁目15-2-1203
吉田政徳	592-2066	005	札幌市南区石山4条6丁目
板田孝弘	581-8993	005	札幌市南区真駒内緑町2丁目10-14 チェリス真駒内106号
辻正一	279-6345	060	札幌市中央区北4条西7丁目緑苑第2ビル 712号
原橋進	591-9537	061-22	札幌市南区藤野3条7丁目9-3
大房修平	823-9064	062	札幌市豊平区平岸5条10丁目7-2-105

〔家族会員となられた方〕

○渋谷信六・○弘子			
○武沢和義・佐知子			○印は従来、個人会員として加入されていた方
○中正憲・弘子			
○小野木弘司・幸子			
○早坂泰夫・みどり			
○井上公雄・○則子			
○戸津高保・以知子			
○石橋孝継・○美津子			
三谷信一郎・通子	004		札幌市豊平区真栄1条2丁目24-12 ☎881-3934
○松田進・春江	063		札幌市西区山の手1条1丁目3-25-405 ☎614-3475

〔住所変更等〕

佐藤清左衛門	885-3664	004	札幌市豊平区美しが丘3条3丁目2-11
沢部勝	373-6817	061-11	札幌郡広島町里見町1-6-8
鈴木克司		014	東京都品川区豊町4-18-9-302
榛葉貴博		655	神戸市垂水区泉ヶ丘1丁目9-1 川崎重工汐見寮420号室
佐藤辰夫	0144 74-3432	053	苫小牧市豊川町3丁目2-9
田子元樹	667-0489	063	札幌市西区西野2条6丁目3-60-101

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付

☎(011) 251-5465